史遊サロン通信

No 265 号
平成30年
7月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp
新井宏

朝米会談

「成功」を演出する欺瞞の合意
しかし真の成果を導くであろう

二ヶ月前に、米朝トップ会談のことを書いた。やはり歴史的な事件なので、ぜひ自分なりの予測を述べて置きたかった。それが歴史に遊ぶ者の特権である。

ただし、進行形の事件では、すぐに結果が出るので、シュンとしたくもない。そんな思いでトランプ・金正恩会談を予測したのであるが一言で言えば「当たり」であった。

金正恩が既に核弾頭も大陸間ミサイルも持っていると執拗に米国を恫喝してきたのは、冷たい米国に対する「求愛行為」であった。彼にとって米国大統領と対等に会談する栄誉は、極めて貴重な成果なのである。

だからこそ、米国は「ご褒美」となる直接会談を拒否し続けてきた。それが、「核兵器を放棄する用意がある」との一言だけで手に入れたのだから、トランプに対して関係者は、「殿、騙されぬように」と一斉に声を上げた。

金正恩が言う「試験禁止・先制使用禁止・移送禁止」は、裏返して言えば、北朝鮮の核保有国宣言に過ぎず、『完全で検証可能かつ不可逆的な核・ミサイル廃棄』とは全く異次元のものである。だから米国の専門家たち三十人のアンケートでも「北が核を完全放棄する」と予測した者は皆無であった。

しかしトランプにとっては、いまや中間選挙が最重要であり、とにかく成果を上げなければならない。一方の金正恩としても、「核を所有している」という無言の圧力さえ維持できれば、核を実際に使用できる訳でもないし、また使用する気もないので、曖昧模糊にできればそれで十分だ。両者で一致しているのは、会談を「成功裡」に終わらせるということだけである。それではどうするか。

「文禄・慶長の役」の後、幕府も李朝も両国間の和平回復を強く望んでいた。しかし「建前」が大きく立ちはだかる。その中で対馬藩が「国書偽造」を画策した。幕府も李朝も薄々は「偽造」を知っていたに違いないが、目を瞑って己酉約条を締結した。

今回の会談は実質的に何の進展もなかった。いや、むしろ後退している面が多い。それは、最初から「粉飾」が前提の会談であった。

米国議会はこんな不明瞭な合意は大統領権限ではなく議会の承認を必要とするといっている。何も具体的な成果のない中で、米軍の朝鮮半島からの撤収まで話が進んでいる。

私は三年ほど前から史遊会通信にも盛んに書いたが、地政学的に見て、米国は再び朝鮮戦争直前の構想「アチソンライン」すなわち韓国を米国の主管防衛地域から外す政策に戻りたがっている。トランプは正直だ。早くもその切り札を切ってきた。

今や米朝ともに「欺瞞の合意」を必要としているが、「瓢箪から駒」で、いずれ歴史がその果実を手にする日がくるであろう。歴史とはそんなものだと思っている。

それは朝鮮半島が中国圏に取り込まれる日でもある。

新井　宏

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の**七月二十一日**です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。

なお、九月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の**九月十五日**です。

「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

ブルガリア共和国とは……

―史遊サロン通信 No二六四・新井宏氏「第一次世界大戦とモンテネグロ」に関連して―

諸橋 奏

ブルガリアとはどんな国

政体　バルカン半島南東部にある共和国、首都、ソフィア。

言語　ブルガリア語。

宗教　大多数はブルガリア正教、他にイスラム教徒・少数カトリック教徒・新教徒等。

人種　ブルガリア人(南スラブ系)約80％、トルコ人約10％、他ロマ・アルメニア人・ギリシャ人・ルーマニア人等約10％。

人口、七一七万人(二〇一五年、世銀)

伝統　ブルガリア人が大切にしている三宝

一、ブルガリア正教(ギリシャ正教等が属する東方教会の一派)

一、キリル文字(ロシア文字)

一、神から賜わったヨーグルト(ヨーグルトづくりは伝統的宗教行事)。発酵乳の起源は紀元前七〇〇〇年頃。

対日関係　社会主義時代から親日的。好例として、大相撲でのブルガリア出身力士の碧山関(現前頭)や鳴戸親方(元大関琴欧州・現委員)の活躍が日・ブ両国の共通関心事となっている。

人類最初の文明についての疑問

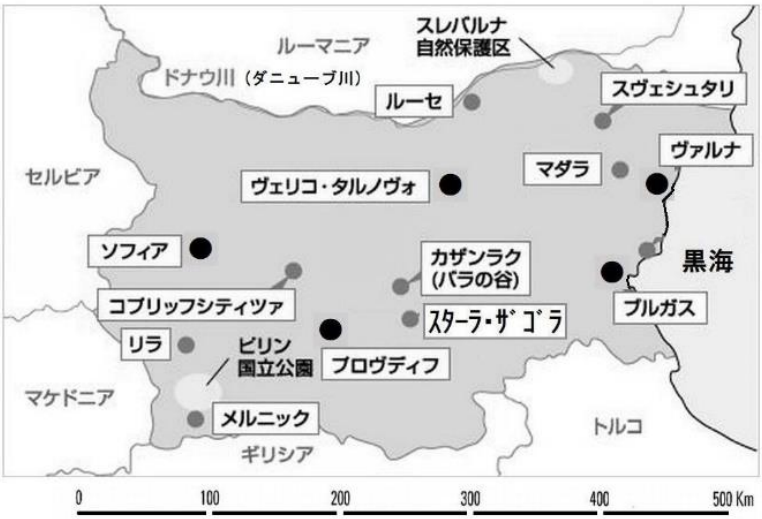
ところで……「我々が知っている最初の文明は、メソポタミア(西アジア)でいえば、ジェムデッド・ナスル期(紀元前約三一〇〇年～前二八〇〇年頃)で、それ以後は、シュメールの初期王朝時代(ウル第一王朝前二八〇〇年頃～前二三八六年)になる。ジェムデッド・ナスル期の少し前のウルクⅥ期(前三三〇〇年頃)から文字が出て来る」というもので、シュメール文明ジェムデッド・ナスル期に始まる文明の源がどこにあったか疑問とされていた。歴史以前の年代は一番古いのがジャルモ期、ハッスナ期、次がハラフ期(以上先ウバイド期)があって、ウバイド期(前四〇〇〇年頃から)、ウルク期(前三五〇〇年頃から)になるが、少なくともウルク期の後期から文明の様相は急変し、それ以前とは繋がらないほど飛躍的に発展してシュメール文明が出て来るわけで、この文明は外から入ってきたのであろうとの考えが一般的であった。

ブルガリアの歴史

現在のブルガリアの地に古代いかなる民族が住んでいたかは不明であるが、紀元前一〇〇〇年頃、インド＝ヨーロッパ語族のトラキア人の名前が知られている。トラキア人はギリシャ人と接触しており、ギリシャ人がこれを書き残したからである。彼らは非常に優れた武器と馬をもっていて勇敢であり、また金銀細工など芸術的なものを作っているし、前五世紀頃には農耕・牧畜民族として定住、すでに国家を形成し、当時現在のソフィアはセルディカと呼ばれて繁栄していた。

その後、マケドニア、ケルト、更に前一世紀頃からローマ人が入って来てギリシャ人を圧倒し、紀元後ダニューブ川辺にローマの植民地を作り、その後四世紀末、ローマが東西

ブルガリア全図



に分かれ(三九五年)、東ローマがビザンチンとなり、ビザンチンの領土になった。その後五～六世紀頃にスラブ人が南下してこの地に入り定住した。六世紀末から七世紀にはアジア系遊牧民族のブルガリア人(原ブルガリア人)が侵入、スラブ人と混血合体し、六八一年、第一次ブルガリア帝国を建設した。当時の首都はプリスカと呼ばれた。バルカン半島最強大国家となったが、一〇一八年にビザンチン帝国に滅ぼされた。一一八七年、タルノボの貴族アッセン・ペタル兄弟が蜂起、第二次ブルガリア帝国を樹立、一三世紀にはその最盛期を迎えるが、一三九六年、オスマントルコに征服され、約五〇〇年間にわたりその支配下に置かれた。

一五～一九世紀は民族復興時代と呼ばれ、解放を求めて度々反乱が起るが悉く失敗、一八七七～一八七八年のロシア・トルコ戦争によりようやくトルコから解放されて、第三次ブルガリア帝国が生まれた。(一九〇八年)

一九一二年の第一次バルカン戦争では領土を大きく増やしたが、翌一三年の第二次バルカン戦争では第一次で獲得したもの以上を失ってしまった。

第一次世界大戦(一九一四年七月～一九一八年一一月)ではドイツ側(オーストリア・ハンガリ帝国、オスマン・トルコ帝国、ブルガリア)に立って戦い、敗戦。第二次世界大戦(一九三九年九月～一九四五年八月)にもファシスト枢軸に加わって参戦(一九四四年)、ソフィアでクーデター、「祖国戦線」が権力掌握、共産主義政権成立。一九四六年九月九日(昭和二一年)王制を廃してブルガリア人民共和国を樹立した。ソ連から戻ったゲオルギ・デイミトロフによる共産党内閣ができ、親ソ関係を構築する。一九八九年、共産党一党独裁体制が崩壊、民主化が進み、一九九〇年に国名をブルガリア共和国と改称。九一年、民主的な新憲法を採択。二〇〇四年にＮＡＴＯ加盟。二〇〇七年一月、ＥＵに加盟。

二〇〇九年七月、ボリソフを首班とする新興野党「ブルガリアの欧州における発展のための市民(GERB)」(右派)が単独少数与党内閣を発足させた。紆余曲折を経て、二〇一四年一〇月、苦心の第二次ボリソフ政権が。そして更なる曲折を経て、二〇一七年五月四日、第三次ボリソフ内閣が発足。

ブルガリア語

印欧祖語(インド・ヨーロッパ語族)から六〇〇〇前頃、東印欧語が西印欧語と分かれ、更にバルト・スラブ語とインド・イラン語に分岐、バルト・スラブ語はバルト語とスラブ語に。スラブ語は原スラブ語と西スラブ語に。そして原スラブ語は南スラブ語と東スラブ語(大ロシア語)に。この南スラブ語が分れて現代ブルガリア語、セルヴィア語・クロアチア語、スロバキア語に分化。

注目のヴァルナ銅器文化

一九七二年(昭和四七)、世界最古の黄金文明・銅器文化がブルガリアのヴァルナで発見され、世界の注目を集めた。

ブルガリア東北部の黒海に面したブルガリア第三の都市(第一は首都で、二〇一五年人口一四九万人のソフィア、第二は六〇〇〇年の歴史をもつというブロヴディフで人口三四万人)ヴァルナ市は人口約三四万人、古代ギリシャの植民都市オデッソスにその源を発する古い町である。ヴァルナと呼ばれるようになったのはアジア系ブルガリア人が第一次ブルガリア帝国を樹立してからである(六八一年)。

一九七二年秋、ヴァルナ湖(ヴァルナ市の西部で黒海が内陸に深く切り込んでいる)の南岸で土木工事の作業中、大量の金・銅製品が発見された。ヴァルナ考古学博物館調査団(発掘責任者スワン・Ｓ・イワノフ氏)の発掘の結果、そこが銅器時代あるいは金石併用時代の後期(紀元前五〇〇〇年期後半)にもさかのぼる古い墓地と判明、当年代はメソポタミアやエジプトに金や銅製品が現れるよりもさらに数百年以上古いものである。

墓は人骨を伴わない「シンボリックな墓」(「ケノタフ」とも呼ぶ)と人骨を伴う墓とに

大別される。副葬品は金製品、骨製の偶像、貝小玉の首飾り、動物の外形をかたちどったもの、動物をモチーフとした金製装飾品、実物大の土製人面(王冠、両眼、口、歯はすべて金製品)、金製の柄をもつ石斧、男根形金製品。銅製品は、斧、槍先、のみ、くさび、針などの道具であるが、土器はユニークな金彩文土器をはじめ、幾何学的模様の大皿などで、オリエント・小アジア(トルコ)から来ていると考えられている。石器多数の大部分はフリント(燧石)の石刃で最長四四センチメートルの非実用的なものも含まれている。銅の鉱山はスターラ・ザゴラ近くで銅の露出部分を見つけて掘り始めたようで専門の坑夫がいたと考えられ、銅製の進んだ形式のピッケルの利器を使っていた。ヴァルナ墓地の意義については、金属製の道具を製作する技術の発明は新石器時代における土器の発明と並んで人類文化史上最も画期的な出来事の一つで、その意味でヴァルナ墓地で発見された良質の鋳造銅器は、非実用的な金製品よりも重要と評価されている。又墓によって副葬品の質、量にかなりの差があることや、王笏の存在は社会の階級分化が進んでいたことを物語っている。そしてこれに続く段階は国家であるが、メソポタミアと異なり、ブルガリアでは、ここで発展が止まってしまった金石併用時代の一つの発展の頂点として認識されている。この文化は紀元前六〇〇〇年期の初頭から始まって、前四〇〇〇年期の中頃に交易と冶金の発生がその頂点に達したと考えられ、いわゆる「カラノヴオ編年」(時代区分)として確立された。

結論としてはヴァルナ文明はトラキアの黄金文化の先駆をなすものであろうと思われるほか、土器はオリエント、小アジアから来ていると考えられる如くおそらくアナトリアと非常に関係が深いので、アナトリアから一方はバルカンに行ってヴァルナ文明になり、一方はメソポタミアの方へ行ってウルク後期かジェムデッド・ナスル期のシュメール文明になるのではないかとの推論がなされている。又参考までに、ブルガリア人の人骨は北欧型とアルメニア型の混合人種で北欧型が顕著だとしている。だとするとインド・ヨーロッパ語族に近く、印欧語族の原郷を南ロシア、ダニューブ川流域に求める学説と相応じるものといわれる。

以上「一九七二年に、突然新しく、世界最古の黄金文明として学会に発表され、世界中にセンセーションを巻き起した『ヴァルナ遺跡』(ブルガリア国黒海沿岸)の発掘が始められてから」現二〇一八年ではや四六年、右論説はどのように進展しているのであろうか。当時発掘された「六〇〇〇年以上前のものとされる世界最古の黄金の財宝は」ソフィアの国立考古学研究所付属図書館とヴァルナの考古学博物館にブルガリア最大のみどころとして展示されている。

(参考文献)

『岩波講座　世界歴史1』(岩波書店)一九七八年
『京大西洋史1西洋文明の起源』村田数之亮編(創元社)昭和四七年
『週刊読売　バルナ古代黄金文明のロマン』(読売新聞社)一九八二年三月四日
『ブルガリア・トラベルガイド』ブルガリア政府観光センター
『ブルガリア古典文字展』(財)日本書道美術館　昭和五六年
『古代トラキア黄金展(解説書)』古代オリエント博物館・ブルガリア人民共和国文化省他　一九七九年
『ブルガリアの遺宝　世界最古の黄金文明展(解説書)』ブルガリア人民共和国文化省、(財)日本テレビ放送文化事業団　一九八二年
『ブルガリアという国』外務省情報文化局編集(財)世界の動き社)一九七八年
『明治ブルガリアヨーグルト四〇周年アニバーサリーフォトブック』(株式会社明治)二〇一三年
『17 18版 地球の歩き方ブルガリア・ルーマニア』(ダイヤモンド社)二〇一七年
「ブルガリア共和国・基礎データ」外務省　平成二九年五月一六日

ブルガリア歴史年表（略史）

紀元前一九～八世紀頃　インド・ヨーロッパ語族のトラキア人が定住
紀元前八～六世紀頃　ギリシャ人が黒海沿岸に入植
紀元前一六八年　ローマ帝国の進出により、マケドニア帝国が滅亡
紀元一世紀　ローマ帝国、この地を占領
三九五年　ローマ帝国が東西に分裂、以降ビザンツ帝国（東ローマ帝国）の属州となる
五～六世紀頃　スラブ民族、ブルガール人（原ブルガリア人）の進出
七世紀　スラブ民族が移動、定着
七世紀末　ブルガール族が移動して、スラブ民族を支配、その後同化
六八一年　第一次ブルガリア帝国成立（～一〇一八年）
九世紀頃　ポリス一世の治世にキリスト教が国教となる
八九一～九二七年　セミョン王の下に最盛期
一〇一八年　ビザンツ帝国により、第一次ブルガリア帝国滅亡
一一八五年　タルノヴォの領主アッセン・ペタル兄弟により、第二次ブルガリア帝国成立（～一三九六年）
一三九六年　オスマン朝により第二次ブルガリア帝国が滅亡（オスマン帝国による占領）（～一八七八年）
一八七〇年　トルコ、ブルガリアの宗教的自治権を認める
一八七六年　全国的反乱
一八七八年　露土戦争を処理するサン・ステファノ条約により、トルコ宗主下の自治侯国となる
一八七九年　ブルガリア公（王）国成立（～一九四四年）、憲法制定
一八八五年　完全独立宣言、第三次ブルガリア帝国成立
一九一二年　バルカン戦争勃発（～一九一三年）
一九一四年　第一次世界大戦勃発、一五年参戦（～一九一八年降伏、終結）
一九三五年　国王ポリス三世独裁制を敷き、強権政治を行う
一九三九年　第二次世界大戦勃発（～一九四五年）、四一年参戦、四四年ソ連ブルガリアに宣戦布告、左翼の救国戦線がクーデターで政権を取り、連合国と講和条約を結ぶ。共産主義政権成立
一九四六年　ブルガリア人民共和国成立、社会主義の道へ
一九五四年　ジフコフが共産党第一書記に就任、親ソ路線を明確に
一九八八年　ベルリンの壁崩壊
一九八九年　共産党改革派クーデター。ジフコフ辞任、共産党独裁体制終焉
一九九〇年　国名をブルガリア共和国に改称
一九九一年　ジェリュ・ジェレフが大統領に就任、民主的新憲法採択
二〇〇七年　ＥＵ加盟
二〇〇九年　「ブルガリアの欧州における発展のための市民（ＧＥＲＢ）」（右派）単独少数与党内閣を発足
二〇一四年　第二次ボリソフ政権発足
二〇一七年　第三次ボリソフ内閣が発足

（引用参考文献）

『17 18版 地球の歩き方ブルガリア・ルーマニア』（ダイヤモンド社）二〇一七年
『ブルガリアという国』外務省情報文化局編集（（財）世界の動き社）一九七八年
「ブルガリア共和国・基礎データ」外務省　平成二九年五月一六日
「東ヨーロッパ」森安達也・南塚信吾（朝日新聞社）

附（つけたり）
『明治ブルガリアヨーグルト』誕生物語

事務局より要望して「日本とブルガリアのヨーグルト物語」を附（つけたり）として追加執筆をお願いしました。

『広辞苑』によれば『ヨーグルト［Yoghurt ドイツ］牛乳・羊乳・山羊乳などを乳酸発酵によって凝固させた食品。バルカン地方（殊にブルガリア）に始まり、各地に広まった。』と（紀元前七千年頃、偶然にできたという）。

一方、『明治屋食品辞典　食料篇』には『Yogurt（英）ヨーグルト　語源はトルコ語

yoghart の出。「ミルクから作った酸っぱい発酵液で、トルコおよび Levant 諸国で造られる」[SOD]とか「カスタード状の固さの培養ミルク食の一」（中略）生物学者のメチニコフが老衰の原因を腸内細菌毒素の中にありとの説を唱え、ブルガリア国に長寿者の多いのをヨーグルトの効に帰したことから有名になった。』と。

ところで『民族』(nation)は「文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同族意識をもつ人々の集団、文化の中でも特に言語を共有することが重要視され」と定義されている。「ヨーグルト」を解するのに、辞典では、ドイツ語・英語、語源はトルコ語、「殊にブルガリアに始まり」とあるがブルガリア語は出て来ない。

ブルガリア語は印欧語族の東印欧語、バルト・スラブ語～南スラブ語群に属し、英・独語は西印欧語、チュートン・ゲルマン語群に属しているが、トルコ語は非印欧語である。

このヨーグルトをめぐる言語一つを見てもブルガリアという国に「長い苦難の歴史」を感じると共に、その「歴史を支えてきたブルガリアの食文化の一つがヨーグルト」であることが分ろうというものである。ブルガリアの人々が今も大切にしている三宝の一つに「神から賜ったヨーグルト」（他の二つは「ブルガリア正教」と「ギリシャ文字＝ロシア文字」）がはいっている所以である。

ところで、日本人が牛乳・乳製品を初めて知るのは仏教を通してで、仏教伝来は五三八年とされる(五三二年説も)。仏教涅槃経には「牛より乳～酪～生蘇(酥)～熟蘇～醍醐の五味が出来、醍醐は最高」とある。現乳製品で言うと「酪」は脱脂発酵乳でヨーグルト状のもの、「酥」は豆乳の油皮(ゆば)製法を思わせるクリーム状酥油、「蘇」は乳を加熱し、一〇分の一に濃縮した煉乳で、更に水分を減じるとチーズのようなものに。「醍醐」は？ということになろうか。そして現代、明治屋辞典によれば「日本へ最初にヨーグルトを紹介したのは千葉雄雌郎氏で明治四一年(一九〇八)頃フランスから菌を輸入してヨーグルトを造り自分の糖尿病を癒したという。（中略）戦後ハウザー食の盛行とともに(ヨーグルト造りは)飛躍的に盛んになりつつある。二五年(一九五〇)明治乳業両国工場が本格的製造販売を始め、」云々とある（「明治ハネーヨーグルト」の発売）。

『明治ブルガリアヨーグルト』の誕生は、一九七〇年(昭和四五)アジアで始めての万国博覧会が大阪で開催され、参加国の一つ「ブルガリア館」で出品されていた「プレーンヨーグルト」を試食した明治の社員がこの本物のヨーグルトの味に感動したのがきっかけであった。そしてこの「本物のヨーグルト」と同じ味の商品開発に成功「明治プレーンヨーグルト」を一九七一年三月に発売した。ただ当初から決めていたネーミング「ブルガリアヨーグルト」についてはブルガリア大使館からは名称使用許可が得られなかった。これについては「ブルガリアにおけるヨーグルトは、神からの贈り物、長い苦難の歴史の中でもずっと大切に守り続けられてきた」もので、「軽々しく国名を他国の民間企業に貸し与えられるようなものではなかったの」であった。が、諸努力と誠意が認められ、一九七二年五月、ついに「ブルガリア」の名称許可がおり、一九七三年(昭和四八)一二月、念願の「明治ブルガリアヨーグルト」が誕生した。

主なる引用・参考文献

『植物と文明１』解説書　藤井純夫
(岡山市立オリエント美術館)一九八二年
『明治屋食品辞典　食料篇』(株式会社明治屋)
一九六二年(第四版)
『明治ブルガリアヨーグルト40周年アニバーサリーフォトブック』(株式会社明治)二〇一二年
(非売品)
『英語の語源』渡辺昇一(株式会社講談社)昭和
五二年

出雲大社再考（一九）

空中神殿の謎（3）

寂蓮法師の証言

村上　邦治

本殿一六丈説の根拠として、平安期から鎌倉期かけて活躍した寂蓮法師（一一三九～一二〇二）の、大社参詣時の和歌が挙げられる。

藤原定長（のちの寂蓮法師）の一生は数奇な人生である。醍醐寺の僧を父に持ち、幼い時から和歌に秀でていた。その才を見込まれて、一二才の時、道長に繋がり白河・鳥羽上皇に仕えた、公卿で歌人の叔父にあたる御子左家藤原俊成の養子になった。その後俊成に和歌の天才といわれた定家が生まれる。実子定家が若くして当代有数の歌人として認められた為、定長は遠慮して三五才前後で出家したのである。

後鳥羽上皇の院宣により勅撰集（新古今和歌集）を編纂することになり、定家ら六人の選者の一人になっている。古来、西行、定家と共に「三夕の歌」の歌人として知られ

「さびしさは　その色としも　なかりけり
　槙（まき）立つ山の　秋の夕暮」

と詠み、続けて西行、定家が「秋の夕暮」を入れた和歌が新古今和歌集に収録されている。

寂蓮は旅の歌人と言われた。五二才建久元年（文治六年一一九〇）、出雲大社参詣の旅に出ている。その時二首詠っている。

「出雲のいつきの宮に参りて、いづもの川のほとりにて

出雲川　ふるきみなとを　たづぬれば
　はるかにつたふ　和歌の浦なみ」

これは須佐之男尊が『記紀』にでてくる最古の和歌「八雲立つ」を詠み、和歌発祥の地を訪れた感慨を、素直に歌ったものである。

研究者が問題にするのは、もう一首の

「出雲の大社に詣で見侍れば、天雲たなびく山のなかばまで　かたそきの見えけるなん、此世のこととは覚えざりける

やはらぐる　光や空にみちぬらん
　雲に分けいる　ちき（千木）のかたそぎ」

と、高層神殿の驚きを「この世のこととは思えない」と詠いあげたのである。

この和歌から、京大福山教授は建久造営の本殿が高層であった証拠にした。以来一六丈説の根拠として取り上げられる。

寂蓮の大社に関わる歌はこの二首だけであるが、この歌は寂蓮らしくない。四季の花や木の色合い、ゆったり流れる時のうつろいなどはなく、本殿の高さにただ驚くさまが詠われている。

この時の旅の和歌は、数首残っているがいずれも新古今和歌集特有の空・風・雲など自然のあわれを詠っており、この歌は異色である。しかも和歌の前文では天雲たなびく山（八雲山一七五㍍）のなかばまで達するとして、その高さに驚嘆している。大国主命の神徳を表現したものとの解説もあるが、須佐之男尊の和歌発祥の地をしのんだ歌には、神道や『記紀』に特別な関心を持っていた人物とも思われない。大神神社参拝の時の「三輪の神あわれいく世になりぬらん杉の梢に宿をまかせて」や、住吉大社参詣したときの「ふりにける梢もしるき住吉の松にすきたる風の音哉」をみても、神に対する思いは深くはない。

どうも寂蓮法師は大社参詣の旅に出るとき、「天下の大廈」のうわさや、『口遊』の「雲太・和二・京三」という口ずさみの先入観を持ち、本殿を間近で見たとき、興奮した面持ちで詠み上げたものと思われる。

いずれにしても、この歌や前文のどこにも、一六丈を具体的に示唆する文言はない。寂蓮法師大社参詣の歌を根拠に、一六丈説を主張するには無理がある。この歌は法師の感動を詠ったにすぎないものである。

（この項つづく）

参考文献

『寂蓮の研究』　半田公平　勉誠社
『新古今歌人の研究』久保田淳　東大出版社

小夜の中山

千坂 精一

二十年ほどまえに小夜の中山を歩いたことがある。

動機は『太平記』を読んでいて、俊基朝臣再び関東下向の事〉の件の七五調の美文、

「落下の雪に踏み迷ふ、片野の春の桜がり、紅葉の錦をきて帰る、嵐の山の秋の暮」

のあとに、

「旅館の燈かすかにして、鶏鳴暁を催せば、疋馬風に嘶へて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み来て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつつ、二度越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける」

とあったので、その西行の和歌を調べてみたら『新古今集』のなかにあった。

年たけて　又越ゆべしと思いきや
　命なりけり　さ夜の中山

というのである。

西行が生長らえて二度も越えたことを羨ましく思ったという小夜の中山とはどんなところか歩いてみたい衝動に駆られた。

思い立ったが吉日で、矢も楯も堪らず、初夏に入っていたが構わず出掛けた。

静岡県は、むかし伊豆、駿河、遠江の三国に分かれていて、沼津港へ流入している黄瀬川から東の半島が伊豆国、その西の大井川までが駿河国、さらにその西の豊川までが遠江国になっていた。

小夜の中山は、その遠江国榛原郡北方の菊川から掛川にかけての山中にあるのだが、今回は大井川を渡ったところの金谷から上ることにした。

東京駅で弁当を買って新幹線に乗り、静岡駅で在来線に乗換えて金谷駅で下車した。

金谷駅は、町はずれのやや小高いところにあって、駅舎を出ると密集した町並みとそのさきに大井川が俯瞰できる。

大井川は、そのむかし、

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川、

といわれたように大雨の増水でたびたび川止めにあったので、金谷は対岸の島田とともに足止めされた客で賑わった宿場であった。

その金谷の町に背を向けて、線路を潜り駅裏へまわると長光寺に出る。

ここはむかし一里塚があったところで、境内に芭蕉の、

道のべの木槿は馬に喰われけり

の句碑が立っている。

長光寺横の緩い石畳の金谷坂を上って牧之原台地の北端に出たところにもうひとつ、

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

の句碑がある。

牧之原はここから南へ二十キロにおよぶ谷や沢が深く入り込んでいる台地で、そこに一万五千ヘクタールといわれるわが国最大の茶園が広がっている。

この台地はもともと水利が乏しかったので幕末までは荒地のまま放置されていたが、明治維新になって帰農した旧幕臣や大井川の渡船開始で失業した川越人夫などが入植して開拓された。

以前、戊辰戦争後陸奥上北郡へ追い遣られて斗南藩を興した会津の人達のことを取材したことがあったが、牧之原は下北半島のような厳寒僻地ではないにしても、慣れぬ手に鋤鍬を握っての荒地開墾は悲惨を極めたであろうことが察せられる。

金谷坂を上りおえてすこし行くと〈諏訪原城跡〉の標識があった。

そこを右折して小道の竹藪へ踏み込んだところが大手門跡で諏訪神社が祀られていたから、信玄の四男勝頼が高天神城攻めの拠点にすべく築城したに相違なく、いずれ書くときがあるから取材しておきたい衝動に駆られたが、ついではいけない書くときにあらためて取材すべきだと戒め後ろ髪を引かれる思いで

目を瞑り、菊坂を下って菊川集落の外れの四郡橋を渡って青木坂の上りにかかる。

ここから西の日坂までなだらかにつづく丘陵地帯が小夜の中山である。

往古から近世にいたるまで東国と西国を結ぶ唯一の道だったので、『更級日記』『東関紀行』『十六夜日記』など多くの書にその名が出てくる。

この小夜の中山は箱根、鈴鹿とともに東海道の三大難所だったときいていたので、覚悟して青木坂にとりかかったのだが、なんの苦もなく上れたので張り合いがなかった。

坂上の久延寺に詣でたあと峠の茶屋の近くの公園内にある小さな四阿で小憩して弁当をひらき昼食を済ませた。

そこからさきは平坦な尾根道がつづく。

『海道記』に、

「佐夜の中山にかかる。この山をしばらく上れば左に深き谷、右も深谷、一峯長き道は堤の上に似たり。両谷の梢を眼下に見て群鳥の囀りを足の下に聞く」

とあるが、なるほど長い堤防の上を歩いているようであった。

右も左も茶園が広がっていて、季節が春なら雲雀でも囀りそうな長閑な気配である。

なんの変化もない単調な道程に飽きて退屈のあまり周辺に人影のないのをさいわい音痴を顧みずに高歌放吟して歩いた。

歌い疲れてまた黙して歩き、

「俺はいま金谷から掛川にかけての小夜の中山を歩いているんだ」

あらためてそう思った途端、こんどは歌舞伎の台詞が口を衝いて出た。

河竹黙阿弥作『青砥稿花紅彩畫』の二幕目稲瀬川勢揃の場のところである。

この演目は『白浪五人男』でよく知られているからご存知のかたが多いと思う。

舞台は五人の盗賊が揃ったところへ捕手に囲まれ、一人一人が名を名乗り捕縛されて刑罰を受けようと覚悟する場面での頭分日本駄右衛門の台詞を思い出したのだ。

それはこうである。

「問われて名乗るもおこがましいが、産れは遠州濱松在、十四の歳から親に放れ身の生業も白浪の沖を越えたる夜働き、盗みはすれど非道はせず、人に情けを掛川から金谷をかけて宿々で義賊と噂高札に回る配付の盥越し、危ねえその身の境界も最早四十に人間の定めは僅か五十年、六十余州に隠れのねえ賊徒の首領日本駄右衛門」

というのである。

話は逸れた、もとへもどす。

道はやがて沓掛から坂口を経て西坂のヘアピンカーブの急坂を下り、谷間にひっそり固まっている集落の日坂に至る。ここまでで小夜の中山は終わる。

国道一号線に出たところに神社があったので境内に入り欅の大木の下で涼をとりながら休息する。

参拝して社務所で神社の縁起をきいたら、現在は譽田八幡宮というが、以前は己等乃麻知神社といったという。

あとで調べてみたら、延喜式内社の遠江国佐野郡のなかにその神社の名があった。

『延喜式』は延長五年(九二七)に完成しているから、そこに記載されているということは鎮座千年以上の古い社ということになる。

疲れたからタクシーを呼んで貰おうと頼んだら、神社前がバス停だから待ったほうがいいとすすめられ、結局バスで掛川駅に行った。

今川の重臣朝比奈泰朝の掛川城に寄ってみたい誘惑に駆られたが、夕暮れになってしまっていたので諦めて新幹線で帰宅した。

小夜の中山は狭谷の長山の転化ともいう。

本邦の大和朝年代の問題点

高橋　正彦

A――　緒　論　――

新井先生は五月例会に「古事記崩年分注の資料性検証」（『古代史の海』八三号二〇一六年四月）」を提示された。当初これが何を意味するか解らなかったが、徐々に、拙論（今橋通泰『大和朝発生期における―暦帝紀と紀年法』一九七九年）に対する、解りやすい争点が見えて来たので、ここに試論を纏めてみた。

そこで十年以上前の拙論のOCRによる再編集を試みたが、一五〇頁部分＝「崩年」部分で躓いている。そこでこの部分を整理する。

B――　拙論の要旨　――

大和朝初期より独自な暦日と年次記録は伝承された。（これ等「帝紀」の暦日伝承の裏には、当初強大であった女性原理＝地祇に対し、上天原理が卓越するも徐々に前者の比重が増大するに至り、更には女性天皇が成立するに至る事実の伝承が暗に示されている。）

C――「帝紀」の年次記録に付いて　――

本邦金石文や朝鮮資料において、飛鳥朝以前の天皇名を特定し得る物はない。仮に是を特定実証し得る物があるとしたならば、それは極めて重大な発見である。

――然るに、書紀の天皇の葬陵年（干支年次の十二支部分）及び、その日月（冬至日と仮定）には重要な合致があり、事実と推定できる。【是が本論の予測結論である。】――

D――　書紀天皇の葬陵年と月日　――

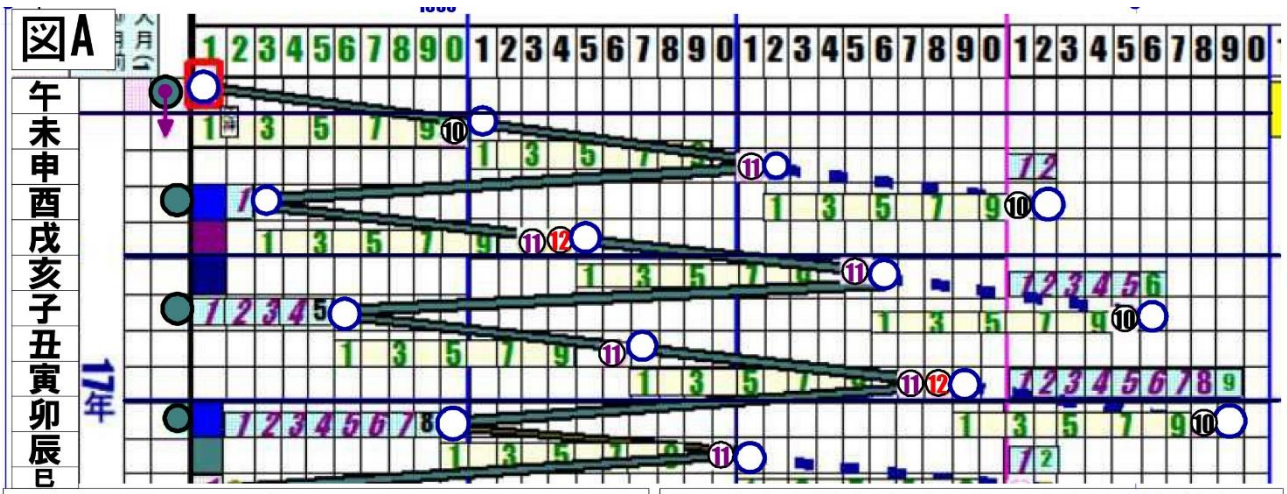
書紀記述の応神～允恭天皇の葬陵年・葬陵の日月には重要な法則性がある。

――応神の葬陵十月一日を冬至と仮定し、以後の冬至日の推移を図示すると、図A・図Bの通りとなる。――

（太陰暦の一年周期は三五四日であるので、太陽運行の一年周期＝三六五日に対し、毎年十一日進む。但し、四年毎に冬至間の累積間隔は一日長くなる。是を図中太線と期間巾⑫で示す。又太陰の天球上の運行は、この他に七〇年で二四日早くなる＝この進行日を適宜二十四回補充する。この補充年を図左枠●で示す。この各一日補充により、次回の冬至日は一日早まる＝是を期間巾十で表示する）

――以上計算の天文定数は、【月齢＝二十九・五三〇五八日、太陽年＝三六五・二四二五日による】

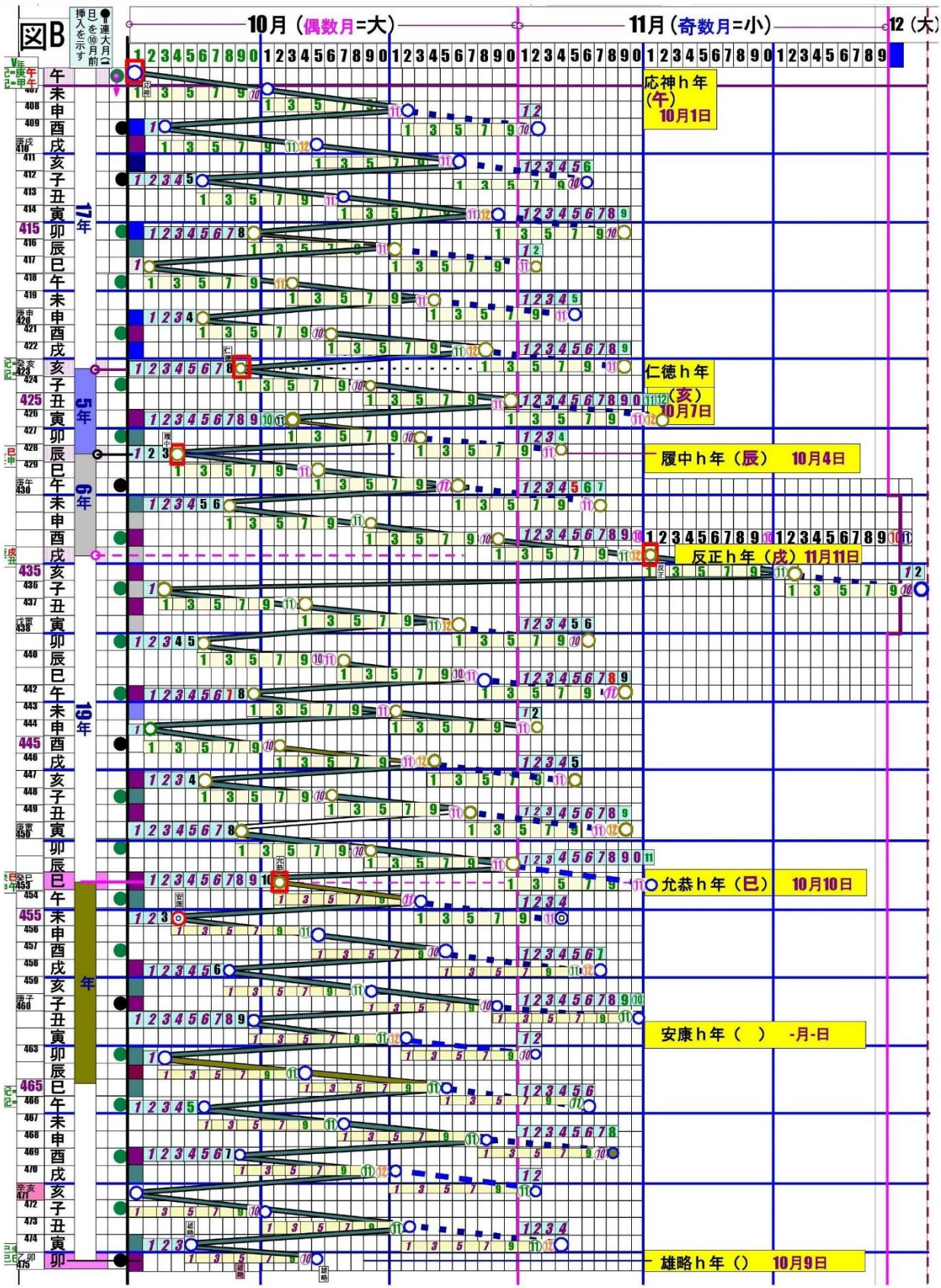
――図A図Bには次の様な意味がある――



太陰太陽暦における冬至日の移行

●1太陽年≒365.2425日であるから4年に1日冬至は遅くなる。
●1太陰月≒29.53058日に付き、1年は29と30日の連続となる。
●太陰太陽暦の1年は354日につき、冬至（○）は年に11日遅くなる。これを3年繰り返すと冬至は1ヶ月遅れ、季節が合わなくなるので、茲で1ヶ月を補う（閏月）。**是をグラフ表示すると冬至日は年の経過に対し、【図の様に波型に逡巡する。】**

――図の⑪⑫は冬至日が前年より⑪⑫日遅れる事を示す。――



冬至日の変遷パターン　冬至日の変遷パターンより十月一日が冬至となり、午の歳となる場合は二十年前後の年代巾の期間において、一例以外は全くなく、この二点(十月一日)(午歳)の二つの条件により、十月一日を応神天皇の葬陵年とする年次は特定される。同様に十月七日・亥の歳の仁徳葬陵年も特定される。以下同様。

——ここから、日本書紀に記載された、応神・仁徳・履中・反正・允恭天皇に至る葬陵年(干支の内の十二支年次に限る)とその日・月には信憑性があることになる。——

古代暦には、景初暦・元嘉暦・儀鳳暦等があるが、その意味する処(閏月の挿入法・冬至の決定等)は数的に難解で、部外者には良く解らない。これ等に対し日月の理論的な運行状況を、簡単な図示で直観的に示し、是により暦法問題の直観化・客観化を図った。

●この結果、応神の葬陵(十月一日＝午歳⚹冬至と仮定)、仁徳(十月月七日＝亥の歳)、允恭(十月十日＝巳の歳)　ーーー等々の、夫々の十二支年・日月には明確な対応関係＝(書紀の葬陵年月日記述の信憑性と明確な暦の存在)、　がある事になる。

E―― 結論【古代史史料の信憑性】――

本邦大和朝時代において、各天皇(大王)の実在を示す信憑性のある史料はない。中国朝鮮資料に僅かに干支年代資料が散見するが、特定の天皇を実証しない。又、本邦金石文に、

「獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時」を

辛亥年「ワカタケル大王(雄略天皇)　志木宮にある時

と読む説(稲荷山鉄剣銘)が僅かにあるが、明確に雄略天皇が示されている訳ではない。

これらの具体例から解るように、各天皇の存在を実証する条件として、一般的に、【①考古資料】・【②干支年代等の古記録】等が考えられているが、実は、

ーー書紀記載の【天皇の葬陵年月日】は、明確にこの①②の条件を明記しているーー

(書紀記載の天皇の葬陵年次は、十二支年次において暦計算の存在を示し、又、この十二支は各陵＝考古資料＝の軸線方位を示す。)

――――――――――――

E―― 【本論の背景事情と技術的情報】

大和朝古記録の信憑性を判断する基準は何かとの問題提起がなされた。是を推敲するなかで、その重要な要素は干支年次記録(暦法)と考古遺物の二面であると判断するに至った。

是の視覚的試行を試みた物が、図A図Bであるが、実は、その諸元情報の『詳細を失念の故に』的確に説明出来ない事を自覚した。そこで是等を明解化・再整理する次第である。

●　図A図Bの特質(旧説の再認識)　●

図は太陽暦に基づく日月の変移及び、特定の太陰太陽暦の暦日を厳密に表示したものではなく、両者の要素を図上計算し易く仮説的にアバウトに表示したものである。

午歳十月一日を冬至初回と仮定すると、以後の冬至は毎年十一日遅くなる。三年後には十一月に入るがこの月を閏十月とすると、日月移行図ではここで回帰し折線となる。

ーーこの図示された折返しの総計で、太陽暦への調整の為の挿入暦日の総計が解るーー(該当年を七〇年に限定する。是は太陽暦でーーーーー二五五六七㈰＝ｘに相当。

(イ)　右七〇年に対する太陰暦の積算日数は二九・五三〇五八㈰×一二月×七〇年＝二四八〇八㈰　この間、閏月の挿入総計は二五ヶ月(七三八日＝太陰暦日ーー計二五五四四日＝ｙ)となる。

(ロ)【ｘｙの残差は二三(実際は二四)日となる。】　【図A図B上で　①㈰÷三年の比率で計二四日を十月の後の小の月に挿入。是を●で表示】　(結果、翌冬至は①㈰進むーー巾⑩㈰で示す)

要するに図ABは仮説の図上検証を示した物で、右の仮説(イ)(ロ)等が合理的に成り立つかを確認している。古代暦法では天文定数は分数表示されており解り難いので、本図で諸種試行するのが有効と考えた次第である。

●　●　将来への展望　●　●

ーー但し条件に誤りがあると、葬陵日月が崩れてしまう。そこで、本図を数式計算で確認する方法がないものか思案する次第である。

(2018.6.28)

編集者の註記　本稿は高橋さんの著書『大和朝発生期における―暦帝紀と紀年法』一九七九年の総括であり、一部の基礎資料がその著書内での検討により算出されているので、難解な部分がありますが、ご了承下さい。